



第1章

コリンズ社の歴史

「コリンズの名前を耳にしたことのないアマチュア無線家はいない」と言ったら言い過ぎでしょうか。かなり昔にKWM-2やS-LINEを世に送り出した会社であることは知っていても、その成り立ちや現在の姿は案外知られていないのが実態でしょう。

コリンズとはいったいどんな会社なのでしょうか。その生い立ちから現在までを簡単に紹介します。



アマチュア無線ビジネスで 始まったコリンズ社

アーサー・コリンズ(写真1-1)家の地下室で始まったアマチュア無線のビジネスは、コリンズ氏が23歳のときの1933年9月9日、米国アイオワ州シーダーラピッズ1番街2920番地のオフィスビルに本拠地を移し、Collins Radio Inc.として設立し登記されました。1933年の暮れの時点での社員数は、コリンズ氏と速記者兼秘書を含め総勢で8名でした。

当時、コリンズ社の主力製品は、4A型の20Wクリスタル・コントロール方式のアマチュア用送信機(写真

1-2)と、同じくアマチュア用の45A型(A3/40W, CW/125W)の送信機、そして、その後に数年間継続して生産された300A型の200W短波放送用送信機、および300E/F型の100Wと200W放送用送信機の4モデルでした。

1933年、会社にとって大きな変革が起きました。それは、米国の南極探検隊が使用する無線機のうち、受信機を除いたすべてを一括して受注したのです。それまでは、国内よりもむしろ海外向けに、たとえばルーマニアのミシエル皇太子、メキシコの医師、アフリカの貿易会社、インドのマハラージャ(土候国の王様)、スマトラとボラコの果物業者、米西海岸の漁業

見本



写真1-1 1950年頃のアーサー・コリンズ氏(Arthur A. Collins)とコリンズの送信機32V-1, 受信機75A-2で構成したシャック

写真1-2

4A型の送信機は当時、US67ドルで販売された。出力は、3.5MHz：28W，7MHz：25W，14MHz：約13Wであった



会社，あるいは南米各国などがコリンズ社製品のユーザでした。

コリンズ氏は14歳のときに，“9CXX”のコールサインで開局しました(写真1-3)。そして，コリンズ氏は1925年，米国海軍でさえ困難であったマクミランによるグリーンランド探検隊との無線通信を成功させ，そのビッグ・ニュースが当時の新聞紙面を飾り，その名を一朝にして多くの国民に知らしめた実績がものをいいました。

第二次世界大戦で爆発的な成長を遂げる

その後，政府機関からの受注も増加し，コリンズ社は順調に成長しました。1939年には売上高が約US50万ドル，従業員数は150名となり，1941年には売上高が約US220万ドル，従業員数は485名となりました。そして，この年の12月に勃発した第二次世界大戦に合わせて，コリンズ社は爆発的な成長を遂げました。

最初の契機は，米軍が使用する第二次世界大戦中のメイン通信システムとなったTCSシステム(写真1-4)で，ファミリー・ファクトリを含めて約35,000セットが生産されました。



写真1-3 コリンズ氏がアマチュア無線を開局したときの9CXXのQSLカード

さらにコリンズ氏は，次の新たなビジネスにも照準をあてて作戦を展開していきました。それは航空機に搭載する小型で大出力，信頼性の高い無線機の開発でした。前年の1940年には，17D/F型という航空機用オート・チューニング送信機の第1号を発表しました。

コリンズ氏は，熱心な航空機器の研究者で，早い時期から航空機のための，航空機と地上間の機器開発研究を始めていました。現在も使用されているオート・チューンの基本的な考えを持ったのは，この仕事をしているときでした。最悪の条件の中，高い精度で同調する機能は，通信産業の中での卓越したキー・テクノロジーでした。

コリンズ氏は，地方空港が開港すると，広範な一角を借りて，近代的な航空機の格納庫，およびコントロール・タワーと関連するオフィスを建築しました。同時に，コリンズ社は，DC-3型双発ビーチ・クラフト，および個人的に訓練機を所有して，これらの施設や機材は上空での航空無線のテストに使われました。また，顧客の飛行機にコリンズ機材を設置するための作業場としました。さらに米国内に緊急を要する修理部品を送り，あるいは役員の移動などに活用することをねらったのです(写真1-5)。

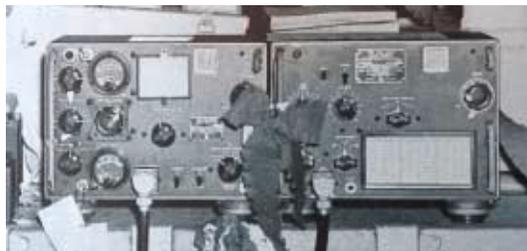


写真1-4 TCSシステムの主要スペックは，周波数レンジは2～12MHz，出力はA3：12W，CW：25W。セパレートされた送信機と受信機で構成されていた